

「ちばエコ農産物」栽培のために！ (品目別栽培カード 25)



いちご・促成(土耕)栽培

千葉県農林水産部

1 栽培基準

いちご・促成(土耕)栽培の「ちばエコ農産物」の栽培基準では化学合成農薬の使用成分回数と化学肥料使用量(窒素成分量)について、使用できる回数・量の上限が定められています。

上限回数と上限量は表1のとおりです。



▲収穫中のいちご

表1 いちご・促成(土耕)栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準

(平成22年7月現在)

作型	上 限 量		堆肥施用の目安量 (kg/10a)				
	化学合成農薬 ※ (使用成分×回数)		化学肥料使用量 (窒素成分kg/10a)	牛ふん	豚ふん	鶏ふん	土づくり 的堆肥
	苗購入の場合						
促成	21	15	18.5	3,100	1,200	700	4,000

※化学合成農薬はランナー切り離し以降の使用回数

2 栽培基準達成のポイントと考え方

1 病虫害防除

「ちばエコ農産物」の栽培基準に適合した薬剤防除例を表2に示します。促成栽培では、炭疽病、萎黄病、うどんこ病、ハダニ類等の発生が特に問題となります。発生状況を観察し、予防散布や発生初期の防除を行う他、微生物殺菌剤やカブリダニ剤等の化学合成農薬に含めない農薬を併用し防除を行います。

表2 いちご・促成（土耕）栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準に適合した農薬防除例

処理時期	農薬名	10a当たり使用量 (希釈倍数等)	対象病害虫	備考
8月上旬	セイビアーフロアブル20	1,000倍	炭疽病	発生に応じて使用
	アーデント水和剤	1,000倍	アブラムシ類、ハダニ類	
8月中旬	ベルコート水和剤	1,000倍	炭疽病、うどんこ病	
8月下旬	アントラコール顆粒水和剤	500倍	炭疽病	発生に応じて使用
	※サンクリスタル乳剤	300～600倍	ハダニ類、うどんこ病	
9月上旬	ベルコート水和剤	1,000倍	炭疽病、うどんこ病	
	ダニサラバフロアブル	1,000倍	ハダニ類	
9月中旬	スタークル粒剤	0.5～1g/株	ワタアブラムシ	定植時処理
9月下旬	※インプレッション水和剤	2,000倍	うどんこ病	発生に応じて使用
	アフーム乳剤	2,000倍	ヨトウムシ、ハダニ類等	
10月上旬	※インプレッション水和剤	2,000倍	うどんこ病	発生に応じて使用
	サンマイトフロアブル	1,000～1,500倍	ハダニ類	
	※ゼンターリ顆粒水和剤	1,000倍	ハスモンヨトウ等	
10月中旬	※インプレッション水和剤	2,000倍	うどんこ病	
	※コロマイト水和剤	2,000倍	ハダニ類	
10月下旬	モスピラン水溶剤	2,000～4,000倍	アブラムシ類	
	フルピカフロアブル	2,000～3,000倍	うどんこ病	
11月中旬	※スパイカルEX	100～300mL	ハダニ類	ミヤコカブリダニ剤
12月上旬	※スパイデックス	100～300mL	ハダニ類	チリカブリダニ剤
12月中旬	マッチ乳剤	1,000～2,000倍	ミカンキイロアザミウマ	
1月上旬	※スパイデックス	100～300mL	ハダニ類	発生に応じて使用
2月上旬	チェス顆粒水和剤	5,000倍	アブラムシ類等	発生に応じて使用
2月中旬	※スパイデックス	100～300mL	ハダニ類	発生に応じて使用
	カスケード乳剤	4,000倍	ミカンキイロアザミウマ	
3月上旬	フルピカフロアブル	2,000～3,000倍	うどんこ病	
3月中旬	マッチ乳剤	1,000～2,000倍	ミカンキイロアザミウマ	

注) ※印は、「ちばエコ農業」における化学合成農薬に含めない農薬

いちごには、育苗期（定植前）のみ使用可能な化学合成農薬があるため、使用基準を必ず使用前に確認してください。

A 育苗期 ～定期的な農薬散布と高温期、定植前の集中防除～

●炭疽病、萎黄病は確実に徹底防除

炭疽病や萎黄病は、育苗期の防除で最も気をつける必要があります。炭疽病は雨よけ施設で育苗を行うとともに、必要に応じて、セイビアーフロアブル等の殺菌剤をランナー発生以降定期的に散布します。萎黄病は土壌からの感染を防ぐため、土壌消毒またはベンチ等により土壌から隔離して育苗します。



▲萎黄病発生圃場の様子

●うどんこ病は高温期にも防除

苗が感染していた場合でも7、8月の高温期は一時的に病徴が抑えられますが、9月の定植以降気温の低下とともに発生が増加します。定植前にはベルコート水和剤等を散布すると効果的です。

●ハダニ類は定植前に効果の高い薬剤で仕上げ防除

苗からの持込みを防ぐため、定植前には必ず、ダニサラバフロアブル等防除効果の高い薬剤を、かけムラのないよう葉裏にも丁寧に散布します。

B 定植から開花期 ～開花期までに発生を抑える～

●うどんこ病

うどんこ病が花房に発生してからでは防除が困難になるため、開花期までに確実に発生を抑えます。定植後は予防のためフルピカフロアブル等を散布します。

●ハダニ類

定植後の防除は、サンマイトフロアブルや、ヨトウムシ等にも適用があるアファーム乳剤等を散布します。11月以降の防除は、ハダニ類の天敵であるカブリダニの散布を中心に行ないます。カブリダニを有効に活用するためには、11月までにハダニ類の密度を低下させておくことが重要です。

●アブラムシ類

モスピラン水溶剤、カブリダニ剤放飼後はチェス水和剤等を発生初期に散布します。

C 収穫期 ～天敵及び生物農薬の利用とミツバチ、果実への影響を考慮した適期防除～

●うどんこ病

春先からの発生については、フルピカフロアブル等の予防散布を行うとともに、発生初期にトリフミン水和剤、アミスター20フロアブル等で防除します。

●ハダニ類

開花期以降はミヤコカブリダニやチリカブリダニ等のハダニ類に対する捕食性天敵を中心とした防除を行います。放飼方法は市販のカブリダニ剤を一定の間隔で葉上に散布します。ミヤコカブリダニの後、ハダニ類の発生に応じて低温に強いチリカブリダニを放飼します。また、カブリダニの定着を促すため放飼直後の薬剤散布は控えます。

放飼後にハダニ類が発生し、増加傾向にある場合はカブリダニに影響が少ない薬剤で補完防除を行います。

●アザミウマ類

2月中旬以降は発生初期にカスケード乳剤等を散布します。



▲ハダニ多発時の被害



▲ハダニを捕食するチリカブリダニ

2 施肥と土づくり

「ちばエコ農産物」栽培基準に適合した堆肥及び肥料の施用例を表3に示します。牛ふんもみ殻堆肥等による土づくりに加えて、有機質肥料を含む肥料の施用により、「ちばエコ農産物」の栽培基準の達成が可能です。

なお、表3の施肥例は主要農作物等施肥基準（平成21年、千葉県）の施肥量に準じていますが、各圃場の施肥量は土壌診断に基づいて決めます。

また、登録名称内に「有機」などの文字が記載された肥料でも、化学肥料由来の窒素を含んでいることが多いので、JAまたは肥料販売業者に問い合わせ、有機質由来と化学肥料由来の窒素の割合を把握しておく必要があります。

表3 いちご・促成（土耕）栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準に適合した堆肥及び肥料の施用例

区分	製品名	保証成分量(%)			現物施用量 (kg/10a)	成分施用量(kg/10a)		
		窒素	りん酸	加里		窒素	りん酸	加里
堆肥	牛ふんもみがら堆肥				4,000			
基肥	有機アグレット666特号	6(0)	6	6	300	18(0)	18	18
	熔りん	0	20	0	35	0	7	0
	苦土石灰				80			
追肥	千葉液肥2号	10(10)	4	8	80	8(8)	3.2	6.4
総施用量						26(8)	28.2	24.4

注) () 内は、総窒素量のうち、化学肥料由来の窒素成分量

☆この「品目別栽培カード」に記載した農薬・肥料使用例は、平成20年度現地実証試験時点のものです。実際の農薬使用に際しては、ラベルの表示をよく確認するとともに、最新の農薬使用基準を守って使用してください。
なお、栽培基準は平成22年7月改訂後のものを記載しています。

- 著 作 千葉県農林水産部担い手支援課
千葉県農林総合研究センター
- 編集・発行 千葉県農林水産部安全農業推進課
- 発行年月日 平成23年1月

■内容についての問い合わせ先
千葉県農林総合研究センター
TEL. 043(291)9987